

阿部正路『天山離離』

なんとという清らかで美しい装丁であろう。白のレザックを貼った表紙の左上に、幅二・二センチ、長さ七・五センチの朱の題簽を置き、それを金箔の線で四マスに区切り、天山離離と金文字を押した、横十五センチ、縦二十五センチの短冊型の一冊。二センチ四方のマスに収まっている天山離離の文字が、またなんとも美しい。この文字は中島讓治氏の書、そしてこの一冊は、阿部正路氏の新中国紀行歌文集である。

「まさに、中国は、遠くて近い国であった。」

中国を旅行し得た感動の、心は〈歌〉になり、目は〈文〉になった。あるいは逆であったかも知れぬ。いや、両方であった。その感動を一つにして、ここに、新中国紀行歌文集と銘うって、『天山離離』を上梓した。

と作者はその「追記」に書いているが、これはそのようにし

工藤 茂

てなった一冊であった。その内容は二部に分かれている。第一部は歌集「雁の塔」、第二部は紀行文「遠い国近い国」である。

日本人の遠いふるさと——中国は、しかし、まさに遠い国であり、しかも近い国であろう。その中国に飛行機で旅の人となった作者は、己を雁に仮託する。そしてそれを西安に並び立つ大雁塔と小雁塔に重ねて、歌集「雁の塔」は誕生した。雁はその心の、遠いふるさとを求めて、上海——西安——洛陽——北京と旅をするのであった。その途次、作者は阿Q、正伝に自分の名前をなぞらえたり、阿倍仲麻呂の末裔に自分を位置づけてみたりしながら魯迅の墓に詣で、あるいは一座の人々を笑わせるのである。その一方で作者の〈目〉は、中国の風土を的確に捉えていく。

叫びてもこだまかへさぬ大陸の山の深さに日は沈みゆく
洛陽に日が沈むとき驢馬たちがいっせいに短き尾を振る
あはれ

天帝と王者と会ひし天壇に天帝も無く民衆もなし

時に鋭き刃を見せる大黄河天より低く流れてやまず

これらの歌にうたわれた風土に生活する人々。それは次の
ように描かれる。

大陸の乏しき水に菜を洗ふ常につつましくいとなむ人は
海を知らずに只耕せる洛陽の民衆の瞳に翳るものなし

鶏の肉下げて佇つ老婆の手指一本の欠けたるが見ゆ

動物の肉裂きてゐる老人の目のやさしさに動悸してゐつ

その一方で、作者は「壁の声」に耳を澄ませ、戦乱に生き
た人々の声を注意深く聴く。

呪咀一つ壁に彫りつつ死に絶えし一族の守りぬきし怒り

か

戦争をとどめんとする戦ひの矛盾の中に死にし青年

これらの歌は、作者の〈心〉が捉えた中国の不幸な歴史で
もあつた。作者のこの〈心〉は、さらに中国の人に、そして
己れに、その祖先の姿を見ようとする。

洛陽の壁にもたれて静かなり遠き祖先の瞳をせる翁

浄玻璃にうつりし吾の横顔はあきらかに北京原人の顔

おそらく右のような認識は、中国の旅のなせる業であらう。

同時にそれは、作者の血の流れをたどつて、不意に肉親への
思慕をよみがえらせる。

あるひは蘇生するかも知れぬ夭折の姉を白馬寺の一室に

待つ

今是他界の父はは恋し長城に来て言ふ吾の言葉吹き散る
けれどもこの歌文集は、決して肉親への挽歌ではない。作
者の肉親と作者自身の半生への挽歌は、もう一冊の作者の歌
集『神居古潭』にうたいこめられている。この集は、むしろ
五十代の作者の蘇生と自己確認の旅をうたったものであつた。
少年の顔に遠い熟年の認識、人間の生命と永遠なるものとの
対比による死の確認、そして日出ずる国の歌びとしての自
覚。それを作者は次のようにうたう。

花の季節過ぎし中国に来て遊ぶ花には遠き吾の熟年
減びざるものを確かに見て置かむたちまち吾は死にゆく

ものを

人間の命はかなししかれども人を創りし仏減びず

落花には遠く落花の如く来ぬ日出づる国の歌びととして

北斗星光り散らして響きあふ吾こそ少数民族の裔

そしてこのようなところに、この歌文集の特色があつたの
である。

(昭和56年11月21日発行・桜楓社)